

国語（中）部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

思考・判断・表現の力を育てる授業の創造
～主体的・協働的に課題を解決する言語活動の工夫を通して～

2. 主題設定の理由

激しく変化する現代社会をたくましく生きていく生徒を育てるために、「何を知っているか」という個別の知識・技能、「知っていることをどう使うか」という意味での思考力・判断力・表現力、「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」という主体性・多様性・協働性が求められるようになってきている。その中で私たちは「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視して授業を改善していく必要がある。また、学びの結果として「どのような力がついたのか」という視点も欠かすことができない。更に、言語の教科である国語科としては、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる言葉の力を、言語活動を通して育成することが求められる。

それでは、どのような言語活動を位置づけることが効果的なのか。身につけるべき力を用いて、それらの力の使い方を考え、主体的あるいは協働的に活動できることで達成できる学習活動とは、どのようなものなのか。このような視点を持って授業をデザインすることが、確かな言葉の力を育てることにつながるはずである。

3. 研究仮説

習得させたい力を明確にし、主体的・協働的に取り組む言語活動を工夫した授業を構築することによって、確かな言葉の力（思考・判断・表現の力）を育てることができる。

4. 研究内容

① 指定教材についての実践研究

- ・言葉の力を育て、主体的に学ぶことができる言語活動を工夫する。
- ・第二次研究協議会の場で、指定教材を基に公開授業を行う。
- ・公開授業、個人研究をもとに活発な議論を行い、方向性を探る。

② 指定教材以外についての実践研究

- ・言語活動の工夫を行い、授業者の授業構想力を高める実践に取り組む。
- ・学習の基礎となる言語能力を高め、言語感覚を豊かにするための実践に取り組む。
- ・優れた教材の開発に取り組む。

③ 指導者である教師自身の言語力を高める取組

- ・理論（実技）研修会をうけ、各自が実践を行ってレポートを作成し、その成果と課題を交流する。
- ・第二次研究協議会において「指定教材」を共同で教材分析する時間を設ける。

5. 研究方法

- ①各市町村単位で「地域サークル」を組織し、指定教材を中心に地域単位での共同研究を行う。その成果と課題について議論を行った上、専門部会第二次研究協議会に持ち寄る。
- ②中心グループによる研究成果を、専門部会第二次研究協議会において公開授業として発表する。さらに部会協議において、研究主題にせまる研究内容や成果などを部会員によって研究協議する。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

4月11日(火) 石教研第一次研究協議会
 14日(金) 各市町村で第一次研究協議会
 9月8日(金) 各市町村で第二次研究協議会

10月13日(金) 専門部会第二次研究協議会(恵庭)
 2月9日(金) 各市町村で第三次研究協議会

2. 専門部会第二次研究協議会での交流

(1) 専門部会第二次研究協議会での交流内容


1年生 教材名『少年の日の思い出』

授業者：伊藤 寿恵 教諭(恵庭市立柏陽中学校)

本時の目標・なぜ、「彼」は思い出を語り出したのか考えよう。

<本時の展開>



	生徒の学習活動	教師の働きかけ	留意点
導入・課題設定	○前時の学習を振り返る。 ○本時の課題を確認する。 なぜ、「彼」は思い出を語り出したのか考えよう。	○前時を想起させる。 ○本時の課題の提示	・ノートにはったプリントで確認 ・前時のうちに付せんやワークシートに書いておく。
課題解決	○以下のものを用意する。【個人】 ・前時に絞り込んだ情景描写と行動描写を2つずつ、付せんに書いたもの。 ・「彼」がどんな気持ちで、なぜ思い出を語り出したのかについて自分の考え。 	○似ている内容をまとめ、読み取ったイメージや行動の要因、「彼」の気持ちやなぜ思い出を語り出したのかを台紙に書かせる。 ○話し合いの途中で一度止め、多くのグループが取り上げていた部分や、教師が注目してほしい部分を全体に提示する。 【教師が注目してほしい部分】 ・「もう、結構」 ・その思い出が不愉快でもあるかのように ・話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。	・話し合い活動 ・以下の役割を決定 ①本日の司会 ②台紙に書き込む人 ③全体発表の発表者 ④台紙を指し示す人 ・実物投影機を使って、本文をテレビ画面に映しながら、注目してほしい部分に線を引く。
まとめ	○各グループで話し合った読み取りを発表する。【全体】 ○次時の学習内容を知る。	○各グループに発表させる。 ○物語の最後まで読み取った後、もう一度前半に戻り、なぜ思い出を語り出したのか確認してみる。 ○後半部分の「彼」が10歳の頃の場面を学習することを伝える。	・どんな部分に注目し、「彼」の気持ちを語り出した理由を発表する。

<授業者より>

- ・生徒が自分で文章を読み取って理解したことを、話し合いの中で活かせるのではないかと思います、この授業を構築した。
- ・時間配分が甘かった部分もあったが、生徒たちはよく頑張っていた。

<意見交流>

- ・付せんの活用法に感心した。生徒同士の話し合いも充実していて良かった。デジタル黒板も効果的に使われていた。
- ・本時の課題は答えが難しいのではないかと。扱う時間が文章の読後でもより良い展開が期待できたかもしれない。

2年生 教材名『字のない葉書』

授業者：桑口 和利 教諭（恵庭市立恵み野中学校）

本時の目標

- ・文章から「父」の本音を読み取ろう。



<本時の展開>

	生徒の学習活動	教師の支援	活動の留意点
導入	・前時までの内容を確認する。ワークシート①		・時代、環境に左右されない気持ちの存在の確認。
課題把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">『父』よ本音を語れ。～字のある葉書～</div>		
解決・努力	<ul style="list-style-type: none"> ・後半部分を音読する。 ・ワークシート② ・心情の変化を数値化する。 ・各グループの変化を交流。 ・父親の本音（台詞で）を考える。 ・他の人の台詞を聞きながら、観点を考える。 ・交流を基に短作文を作り、交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・段階に分けて作成するように指示。 ・父の苦しさも表現させる。 ・「謝罪」「怒り」「その他」に分ける。 ・交流を通しての気づき、変化を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数値の変化に注目させる。 ・次課題の第4時の作文に活かせるようにする。
まとめ	・家族を思う父の姿を確認する。（他の考えもあれば提示）	・時代、環境に左右されない気持ちの存在の確認、その他。	

<授業者より>

- ・作品の時代背景をイメージさせるのが難しかったが、グループ活動を取り入れることで、お互いに学びあいながら文章を読んだり、理解したりという作業ができるように授業を考えた。

<意見交流>

- ・ワークシートにも工夫が見られ、授業を考える上での試行錯誤が感じられた。
- ・4人グループでの活動で、受け身になる生徒がおらず、お互いに協力して作業を進めることができていた。
- ・せっかく良い内容を書いている生徒も多かったため、最後の交流の時間を多めにとっても良かったのではないかと感じた。
- ・作品の時代背景を想起させる上で、導入時に工夫が必要である。映像など視覚に訴えるものは、イメージしやすい。
- ・父親の台詞を想像させるのもよいが、最終的には文章に戻すことも必要。活動には教師の効果的な補足が必要であり、文章の読解につなげて、いかに状況を読み取らせるかが大切なのではないだろうか。
- ・「人物の心情を捉える」と「状況を正確に読み取る」ことの切り替えをしっかりと意識させたい。



3年生 教材名『故郷』


授業者：宮永 裕教 教諭（恵庭市立恵明中学校）

本時の目標

- (1) 記号に込められた意味を読み取り、今後の読みに生かすことができる。
- (2) グループ活動での経験をもとに、適切な語彙を用いた自分自身の表現に活かすことができる。



<本時の展開>

	学習活動	教師の活動と留意点	評価の規準・方法
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の振り返りと既習事項の確認。 ・この文章で最も使われている記号は何だろう。 ・本時の課題板書『3点リーダーの意味について考える』 	<ul style="list-style-type: none"> *テンポ良く小刻みに。 (3点リーダーは、通常二つセットで用いられる。記号のあとは、一字空欄となる。) 	<p>以下</p> <p>◎評価規準</p> <p>▼支援を要する生徒への手立て</p>
展開1	<p>3点リーダーの主な意味～『余韻』『発問・思考の間』『省略』『引用』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山場の場面の音読 「旦那様！……」の…の意味は何か。(→余韻) (主発問1) この余韻「…」に文章中の閩土の感情に関わる言葉を当てはめると、どんな言葉が当てはまるだろうか。(その理由も含めて考える) (③喜びと寂しさ・うやうやしい態度・悲しむべき厚い壁等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・(板書) 3点リーダーの主な意味の確認。 ・前回の山場の場面での3点リーダーの意味の考察。 ・この閩土の発言によって「わたし」の心が大きく揺らいだことを振り返る。 *4人グループづくりの指示。 	<p>◎客観的な事実に着目して、自分なりの考えをもって読むことができる。</p> <p>▼読む範囲をアドバイス。</p>
展開2	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかのグループによる発表。選んだ語句と、その理由も含めて。 ・座席を戻し、それぞれのグループが選んだ感情の共通点を整理。(板書) (様々な感情が入り交じった閩土の様子が余韻となって表現されている。) (主発問2) ㊸「そんなわけじゃないよ……ぼくは……」この二つの「…」の意味は何だろうか。当てはまるように作文してみよう。 ・数名による発表と交流。 	<ul style="list-style-type: none"> * 同じグループ内では、それぞれに同じことをノートに書いておく。ひな形を先に板書で示す。 	<p>▼グループの中で、気付いたことを伝え合い、教え合う環境作りを心がける。少しのつづやきも大きく褒める。</p> <p>◎グループ内での読みを自分自身による読みに活かすことができる。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・この時間で学んだことと、感じたことをノートに各自で整理する。 ・次時の予告 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの記号や行間には意味があり、25通りとは言わないまでも、そこを読むのと読まないのでは物語の理解に大きく関わる。 ・中心人物の変容に関わったのは、閩土だけではない。ヤンお婆さんの登場が「わたし」の変容に関わっている。(伏線) 	<p>▼少しでも書けていたら褒める、励ます。</p>

<授業者より>

- ・物語教材を扱うことが嬉しく、言語活動に深く取り組みたいと考えた。竹内好の訳の独特な部分を子どもたちに味わせたかった。本時の授業については、子どもたちの読みとしては、自分自身の読み取りで終わってしまっている。主人公の気持ちの読みまで至っていないのが残念であり、今後の課題である。

<意見交流>

- ・難しい発問に対しても、明快な回答が多い。子どもたちが主体的に取り組み、受け身でない生徒が多かった。
- ・授業者の板書にも工夫があり、ポイントが明確で、わかりやすい授業だった。
- ・一つ目と二つ目の活動につながりがあり、発展的になっている。生徒は良い意見を言っていたので、最後の場面ではICTを活用し、共有化してもよかったのではないかな。

(2) 専門部会第二次研究協議会での協議内容（分科会での交流）

討議の柱

生徒に身に付けさせたい力と、その獲得に向けた言語活動の実際



分科会① <レポート交流>

学年ごとにレポート交流を行った。文学的教材を基本としながらも他の教材についても多くの実践が寄せられ、教材研究や言語活動の観点において深まりが得られた。以下、学年別に中心となった話題についてまとめた。

1年生

- *文学的教材…『少年の日の思い出』『大人になれなかった弟たちに…』『星の花が降る頃に』
 - ・登場人物の行動や情景描写などを基に、その人物の心情を読み取る力を付けさせたい。・作者の思いを捉え、多様な対話活動を通して自分の考えを広げさせたい。・描写を読み解き、級友の読みに学んで、作品をより深く味わう力を付けさせたい。・フレームリーディングを活用した読みの実践。・多角的な視点で作品を読むことで、小説の読解を深める力を付けさせたい。
- *その他の教材…『竹取物語』『いろは歌』『詩の世界』『シカの落ち穂拾い』『幻の魚は生きていた』

2年生

- *文学的教材…『盆土産』『走れメロス』
 - ・時代が変わっても「家族の絆」には共感できる部分が多い。ただ、生徒と教師の年代も変わり、時代背景が理解しづらいものになっている。・言葉にできなかった心情を言語化する時に、文章内から根拠を見出すことを意識させたい。・いわゆる名作を味わわせる授業、言葉にこだわる指導を考えたい。
- *その他の教材…『新しい短歌のために』『近代の短歌』『モアイは語る』『字のない葉書』

3年生

- *文学的教材…『故郷』『握手』
 - ・登場人物の変容の理由について、文章から根拠を探し考えさせる。・作品の主題に沿った七行詩を創作する。・生徒同士の読みをぶつけ合うことで、新たな視点を持つことができる。・教材を読んで、社会に目を向けさせたい。・主体的、協同的な学習のために、表現や記号に着目した読解も必要である。
- *その他の教材…『俳句を味わう』『作られた「物語」を超えて』『おくのほそ道』『鞆』…

分科会② <小グループでの共同教材分析>

*指定教材について「3つの柱」を中心に小グループで話し合い、授業イメージを作り出していく。

1年生『少年の日の思い出』 2年生『走れメロス』 3年生『故郷』

*3つの柱 ①教材価値（生徒に身に付けさせたい力） ②主体的な言語活動の工夫の在り方 ③評価の在り方

学年ごとの小グループに分かれて共同分析を行った。どの教材も長きに亘り教科書に掲載されているだけあって、研究し尽くされている感は否めない。しかし、生徒の実態に応じて様々な視点からのアプローチの仕方があり、時代が変わってもそれぞれの年代の子どもたちに読み味わわせたい文章であることを、改めて実感できた。どのグループからも様々なアイデアが出され、今後の日常実践のための充実した時間となった。



Ⅲ. 教育課程の研究

今年度は、文学的教材を基本としながらも古文や韻文などの指導実践に関わる研究にも取り組むことができた。第二次研究協議会では、授業配当時数を始め、各教材の関連性、指導目標などを交流し、次年度へ向けて多くの成果を得た。このことにより「生徒が主体的・協働的に課題を解決する言語活動の工夫」という目標に向けて新たな手応えをつかむことができた。次年度以降も、学習指導要領にもとづき、これまで積み重ねられてきた実践・研究成果を活かしながら、部会員の意見・要望を集約して編成・改訂を行っていききたい。

Ⅳ. 理論研修会

1. 理論研修会

- (1) 日時 11月24日(金) 15:00~16:30
- (2) 場所 石狩教育研修センター
- (3) 講師 大橋 賢一 氏 (北海道教育大学旭川校 教育学部 教授)
- (4) 演題 主体的・対話的・深い学びを獲得するための授業の在り方
内容
 - *国際交流から考える国語教育…言葉の力が自分を救う
 - *児童・生徒にとっての「深い学び」とは…他分野との関わり
 - *中学校国語教材としての漢字・漢文の可能性とは
 - ①日本語の特質を探るためのツールとして
(文字学教材、語彙教材、文法教材)
 - ②文学教材として(『論語』、漢詩)



2. 理論研修会の成果

大橋氏による理論研修会では、特に「深い学び」へとつなげる授業の在り方についてお話を頂いた。国語科のみで閉じるのではなく、他分野と関わらせること、発想の転換に結びつけるという新たな視点を紹介されていた。また、漢文学研究の見地から、漢字・漢文は伝統的言語文化にとどまる教材だけではなく、「日本語の能力を向上させるための教材の可能性」があることを提案して頂いた。参加者からも「知的好奇心をくすぐられた」「漢字のメカニズムや文法指導につなげる考え方が興味深かった」などの感想が寄せられ、非常に有意義で実りある研修となった。

Ⅴ. 部会研究の成果と課題

<成果>

二年次研究のまとめとなった今年度。昨年に引き続き「主体的・協働的に課題を解決する言語活動の工夫」をしていく中で、「生徒の身に付けさせたい力とは何か」について、幅広い実践交流、協議を行ってきた。毎時間の国語の授業で、生徒が主体的に取り組みたくなるような導入だったり、個人だけでなく少人数のグループでの協働的な作業や話し合い活動だったり、教材や生徒の実態に応じた様々な言語活動が展開されていることを実感できた。また、言語活動のみが注目されがちだが、何のための活動なのか目的を明確にすることや、教材文の表現つまり「言葉」にこだわりを持った指導にも留意したい。第二次研究協議会のレポート交流の場では、文学的教材以外の教材についても実践紹介があり、大変有意義であった。次年度以降も、部会員全員での協働研究を更に深めていきたい。

<課題>

第二次研究協議会で実践交流の場は確保されており、多岐にわたる教材実践の紹介から部会員が何らかのヒントを得られる機会はある。ただ、研究の深まりとしてはまだ課題が残るところである。公開授業、レポート交流以外にも、各学年での提言発表を受けての交流など、特に午後の分科会の持ち方にも工夫が求められる。もちろん、参加する部会員一人一人が自覚を持ち研鑽を積むことが、日々の授業で生徒たちによいものを還元できることにつながるであろう。今後も、より幅広い分野を網羅しつつ、研究が体系的に積み重なっていくような研究体制の確立が求められる。

(文責 柳本 真理)